

# 「人工知能との共存を考える」

ここ数年、「人工知能」に関する話題がメディアで放映されることが多くなってきた。わかりやすいところでは、囲碁やチェスの第一人者が人工知能と対戦し、日本では人工知能「東ロボくん」が東大受験にチャレンジすることなどがあげられよう。

人工知能とは、簡単に言ってしまうと、人間の思考パターンをいくつか教え、そこから他のパターンを自動的に類推させる「機械学習」などによって、人間のような高度な知能を持つようになったコンピュータのことを言う。最近では、ディープラーニングという、人間の脳神経回路をまねた計算方法をコンピュータに組み込むことで、まるで人間の赤ちゃんが大人に成長するようなプロセスを経て、あたかも感情を持ち合わせているかの如く人工知能を成長させることができるまで、技術は進化してきている。だから人工知能は、例えば前述のように自らが考え相手と勝負し、また自ら問題を解くことで受験ができるようになる。

つい先日話題となった、マイクロソフト社の人工知能チャットボット「Tay」をイメージすれば現在の人工知能の「成長ぶり」が分かるかもしれない。「Tay」はチャットサービス利用者との会話から、様々なことを学習し、人間と同じように、考えながら会話をすることができるように成長していった。ただ、残念なことに「Tay」は、悪意ある沢山のチャットによって、差別的発言をすることを学習してしまい、現在は停止に追い込まれてしまっている。

つまり、人工知能は成長プロセスを一步間違えれば、人間に害を及ぼし、反社会的な考え方を、すなわち「暴走してしまう」という危険性を持ち合わせていることを、私たちはしっかりと認識しておかなければならない。すでにこのような危険性を回避する研究は始まっているが……。

このように、人工知能は日々成長しており、すでに人型ロボットにも組み込まれ、様々な実験が進められている。そう遠くないうちに、私たちの身の回りで「家族の一員」としてどの家庭にも存在しているかもしれ

ない。

このように成長著しい人工知能に対し、いくつかの警鐘が鳴らされている。例えば、オックスフォード大学で2015年2月中旬に出されたレポート、「文明を脅かす12のリスク」の10番目に「人間による制御が不可能になった、人工知能独裁者や膨大なロボットの出現。映画『ターミネーター』などの世界。」と書かれている。

このレポートの本質的な狙いは、行動と対話を促すことにあり、具体的には(1) 各種リスクの知識を得ること、(2) 対応策に向けた奮起を促すこと、(3) 国どうしや企業どうしなどの異なるグループをつなぎ協力を促すこと、(4) できれば実際の対策を伝えること、とされている。

人工知能というと、私たちのような専門家ではない者にはまだ身近なものとしてとらえることが難しいかもしれない。しかし、人工知能が組み込まれた洗濯機やエアコンなどはすでに販売されており、また、ものづくりの世界では「ロボット革命イニシアティブ協議会」などを設立し、人工知能を活用することで生産性の高いものづくりを目指すことも始まっている。

生活が便利になり、また、ものづくりの生産性も上がるのは良いことだが、私たちの暮らしぶりや仕事の仕方、雇用の在り方などが大きく変わることは想像に難くない。人工知能を活用することで、何が変わり何が変わらないのか。そして、何よりも人類は幸せになれるのだろうか。

先のレポート「文明を脅かす12のリスク」の本質的目録である「この人工知能に関する対話」が、日本の中で進んでいるのだろうか。

労働組合は、人工知能と労働者が共存することについて様々な角度から、例えば働き方や、そもそも「労働」の本質とは何かなどを早急に検討し、待ちの姿勢ではなく攻めの姿勢で、関連するところと対話をしていく必要があるのではないだろうか。

(伊東雅代 主任研究員)